

地域認識と幹線道路 」を材料に

いわゆる「あづまかいどう

著者	岡 陽一郎
雑誌名	東北学院大学東北文化研究所紀要
号	50
ページ	57-69
発行年	2018-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024012/

地域認識と幹線道路——いわゆる「あづまかいどう」を材料に——

岡 陽一郎

はじめに

旧仙台藩領に属する地域には、「あづまかいどう」と呼ばれる道路^①と、道路にまつわる伝承が点々と残され、複数の近世地誌にも関連記事が登場する。次頁の表は、その中でもとりわけ情報量の多い、いわゆる『安永風土記』に収録された関連記事を整理したものである。藩城南端の宮城県白石市（刈田郡白石本郷）から、北端の岩手県奥州市（江刺郡上門岡村）まで、薄く広い分布が確認でき、の間ではある種の道路を「あづまかいどう」とする認識が共有されていたことがわかる。現時点で『安永風土記』の存在が確認されていない土地もあるため、事例数は表を上回る可能性もある。

地域の歴史を語る材料として、自治体史や個人による検討、さらには地域おこしや生涯学習の題材ともなるなど、この道路への関心は比較的高い。だが、そこで語られている道路像を並べると、道路の誕生時期や性格、道筋などといった、基本的な情報に齟齬が生じるのだった。本来、同じ道路であれば、齟齬など生じないはずであ

る。

本稿は、かかる事態の原因を検討し、作業を通して「あづまかいどう」とは何かを考えてみようというものである。

一 矛盾を抱える道路

道路の誕生時期には諸説あれ、「あづまかいどう」の名称を實際に文献資料で確認できるのは、管見の限りでは道路が機能していたとされる時代よりも遙か後、近世になってからである。興味深いことに、これは鎌倉時代の幹線道路とされる「かまくらかいどう」と同じである^④。では、その近世にあって、肝心の「あづまかいどう」は同時代人たちに、いかなる道路と認識され、どのような環境に置かれていたのかを、確認してみよう。

享保四（一七一九）年に完成した仙台藩領を対象とした最古の地誌、『奥羽観蹟聞老志』には、以下のような記事がある。

（傍線は筆者）

『安永風土記』（風土記御用書出）における「あづまいどう」記事

記 事	
郡 名	村 名
1 刈田郡	白石本郷
2 刈田郡	郡山村
3 刈田郡	小下倉村
4 宮城郡	国分沖通苦竹村
5 (宮城郡)	田子村
6 栗原郡	二迫姉齒村
7 栗原郡	三迫大原木村
8 栗原郡	三迫平形村
9 栗原郡	三迫岩崎村
10 桃生郡	深谷濱市村
11 磐井郡	西磐井郷赤荻村
12 江刺郡	片岡村
13 江刺郡	倉沢村
14 江刺郡	上門岡村

「旧跡」の「よしか池」・「てうしか森」の「右ニヶ所へ往古我妻海道之由申伝候」とある。白石本郷の書出の「道」の箇所には我妻海道の記載がないため、主要幹線道路と認識されていないか、道として機能していなかった可能性あり。

「名所」として江坪屋敷東北の「うるい峠」あり。「右者源義経公当国御下向之節へ吾妻海道御座候由申伝候事」とする。峠とある以上、道路として機能していたか？。こちらも「道」の箇所には記載なし。

「坂」の「字るい坂」は、当村と白石町の通路とある。この坂は「右坂嶺峠通往古東海道ニ御座候由古道之形ニ御座候」とある。

「道」として「当村下原街通東海道名取郡根岸村長町江之道并国分木下葉師国分南目村宮城野江之道」がある。

「旧跡」として「とりぬ原」の華表原を「往古吾妻海道通行之節塩竈御社一之鳥居相建候之由申伝」とする。

「旧跡」として上沢の「姉齒宿」を「往古此所東海道之節宿有之候由申伝候事」とある。

「道」のうち「東海道 一南へ当郡二迫栗原村北へ三迫平形村江之道 吾筋」とある。現役の幹線道路。脇街道としてもう一筋の道路が載る。

「古塚」の所在地として「東海道両脇」という記述あり。なお当村では東海道は道路の部分に記述なし。ただ、三迫大原木村への道は「坊ヶ坂」として坂の部に登場。

「旧蹟」の中で、長橋という橋の説明に東海道が登場。岩崎村と平形村の境が東海道。また、「道」の項に東海道が出てくる。南は大原木村、北は磐井郡一関町への道

村名は「往古吾妻海道之砌於浜辺市町明立市之日有之候ニ付浜市と申唱村名ニ相成候」とする。

「旧蹟」として東海道跡・駒泣坂・鎧坂・手洗沢・大日沢があげられ、これらは往古の東海道だという。黒沢村大窪という所より赤荻村を通過し、平泉村に向かう旧往還の大難所。坂上田村麻呂の通過伝承を持ち、海道の跡が残る。

「道」のところで、「一 吾筋 但シあつま海道之由申伝候古道」とする。

「道」三筋の中に「片岡村より上門岡村へ通用道 但東海道と申唱候」ものあり。

「道」三筋の中に「東海道倉沢村境柏木立より海道十文字道」がある。

史料①―A

ヲクノホソミチ
東奥細路

アツマカイトウ
東奥通行者

自古封内称東奥通行者或有口碑伝者或有書中記者於名取則在笠島辺於宮城則木下西其道路有与今相会者有与昔異者此地亦其地不分明焉或節曰岩切橋北東光寺前道路之也（後略）

笠島（名取市）から木ノ下（仙台市若林区）に至る、東奥通行と

呼ばれる道路があり、享保四年段階では道筋は不明瞭になっていた。当然、道路が機能していた時期は、これより昔ということになる。

道路の具体的な様子について、同書の栗原郡姉歯村（栗原市）の項は、次のように述べる。

史料①―B 光景ノ古館

松樹以南有古壘泰衡家臣姉齒平次光景之故墟也館下水田往古称東奥道者也

開田に伴う消滅や畦畔化など、現地は幹線道路を意味する「カイトウ」という言葉とは、ほど遠い有様だった。しかし『安永風土記』では、同村上沢にある姉齒宿跡を往古の東海道の宿跡とするように（姉齒村）、かつては沿道に宿も営まれる、それなりの道路と伝えられている。それほど道路にも関わらず、道筋も定かでなくなってしまう原因には、交通環境の変化を受けての道筋の変化や、利用者の減少などが推測される。

「あづまかいどう」衰退の契機を具体的に述べたものに、仙台市青葉区越路の事例がある。当地の「あづまかいどう」は、元禄八年（一六九五年）頃の成立と推定され、仙台城下を対象にした最古の

地誌の『仙台鹿の子』、文化八（一八一）年に記された『囊塵埃捨録』など、複数の地誌に登場する。

史料②―A 『仙台鹿の子』

一 越路とは鹿落坂の辺をいふ、往古の東街道にして、都の方の人は名取郡笠島道祖神前の山脇に付て北の野原に出て、塩手村実方の塚の前にかゝり、大方山の下少幸か橋を渡り、茂ヶ崎山の北七曲がり坂越沢を西へ上り、此鹿落坂を下り、坂下の大川を渡り、米ヶ袋より田町を通り、宮城野木の下へ出でしなり。清水小路清水坂橋其街道筋なり。（後略）

史料②―B 『囊塵埃捨録』

越路。名取郡根岸村今仙台越路此辺の地名なり。昔此所は東街道の道筋にて。江戸・京・大坂・奈良・伏見・堺等の商人。又は諸国の旅客。今の盛岡・秋田・弘前・松前等の奥筋へ。往来せし時多は此所に至り。越坂渡川で通りたる所なれば迎。後人越路と云り。大城御普請あるの時。往還の通路不宜とて。此街道を相潰さる。（後略）

この地の道路の道筋は①―Aのものと重なる部分がある。②―Bには、道路は慶長五年（一六〇〇）に始まる仙台城築城の折りに潰されたところあり、それ以前に道路が結んでいたとされる遠隔地が列記されている。近世の仙台にあって、これらの土地と往来するには、奥州街道が利用されたが、奥州街道は、仙台城築城と同時に進行の城下町建設に伴い新たに城下の基幹として、仙台領内にあっては仙台を起点とする幹線道路網の一環として、藩当局の主導で整備された道

路である。^⑤この点、史料②—Bにある仙台城築城は、確かに幹線道路としての「あづまかいどう」の歴史に終止符を打つに相応しい出来事と看做せる。

事の実否はさておき、近世人たちは「あづまかいどう」を奥州街道の前身に当たる古道と見做していた。従ってその性格は奥州街道と同様、つまり陸奥国内の最重要幹線道路ということになるが、これに相当するものとして、古代には東山道、中世には奥大道の各道路があった。事実、「あづまかいどう」は、主に両者と関連づけられ、どちらかに軸足を置いた説明がなされてきた。

「あづまかいどう」を古代に端を発するものとする見解としては、例えば真山悟氏の研究^⑥、自治体史では『白石市史』や『柴田町史』などがある。『白石市史』は市域に残る事例を対象にし、『柴田町史』は古代陸奥国の交通の概論という違いはあれ、道路の起源を東山道に求める点は共通する。地名辞典の記述も、基本的には同じ見解に立つ^⑦。

ただし、誕生時期を古代に求めるのは一緒でも、東山道とは別の道路に擬する意見もある。陸奥国の太平洋沿岸一帯には「海道」と呼ばれる幹線道路が走っていて、弘仁二（八一）年には陸奥国海道の十駅を廃止したという記録もあるが、これとの連続性を指摘する^⑧のである。代表例に神英雄氏の研究がある。あるいは『石巻市の歴史』では、桃生郡浜市村（東松島市浜市）の「吾妻街道」を件の道路の延長と位置づけ、多賀城と桃生城、あるいは牡鹿柵との連絡道と評価する。そして道路自体は中世にも引き続き用いられ、地域の

基本幹線となっていたとする。

中には「あづまかいどう」の起源をより古く見積もる見解もある。『名取市史』は、今日の名取平野が滞水・湿地の原野だった頃から、外部との唯一の交通路として使われていたと指摘していた。

中世に重きを置く見方としては、『仙台市史』があり、中世の奥大道との連続性を重視し、戦国時代に奥大道の名称が「あづまかいどう」に変わった可能性にも触れる^⑩。より具体的に、かつての笠島村の故地を走る県道39号線を、奥大道の名残を伝える「あづまかいどう」の道筋とする見解もある^⑪。

「あづまかいどう」の誕生時期や、道路の性格について意見が割れた理由は、道路が個々の地域の歴史という枠組みの中で取り扱われることと関係している。誤解を恐れずにいうと、そこでの興味の対象は、個々の地域にある道路であり、総体としての「あづまかいどう」ではない。結果として、個々の道路は余所にある同名の道路たちとは切り離され、それぞれの地域にかつて存在した、あるいは存在したとされる、近世以前の幹線道路に引きつけて分析されるから、他地域を走る同名の道路との比較は不十分とならざるを得ない。特定の地域の歴史と共に道路を語る分には整合性がとれても、余所の成果と付き合わせると、整合性がとれなくなるのだった。

「あづまかいどう」を巡る議論の不一致は、道筋復元の間でも起きている。とりわけ市内に複数の道路を抱える仙台市域で、それは顕著である（地図）。

仙台市域における「あづまかいどう」の道筋としては、まず先の

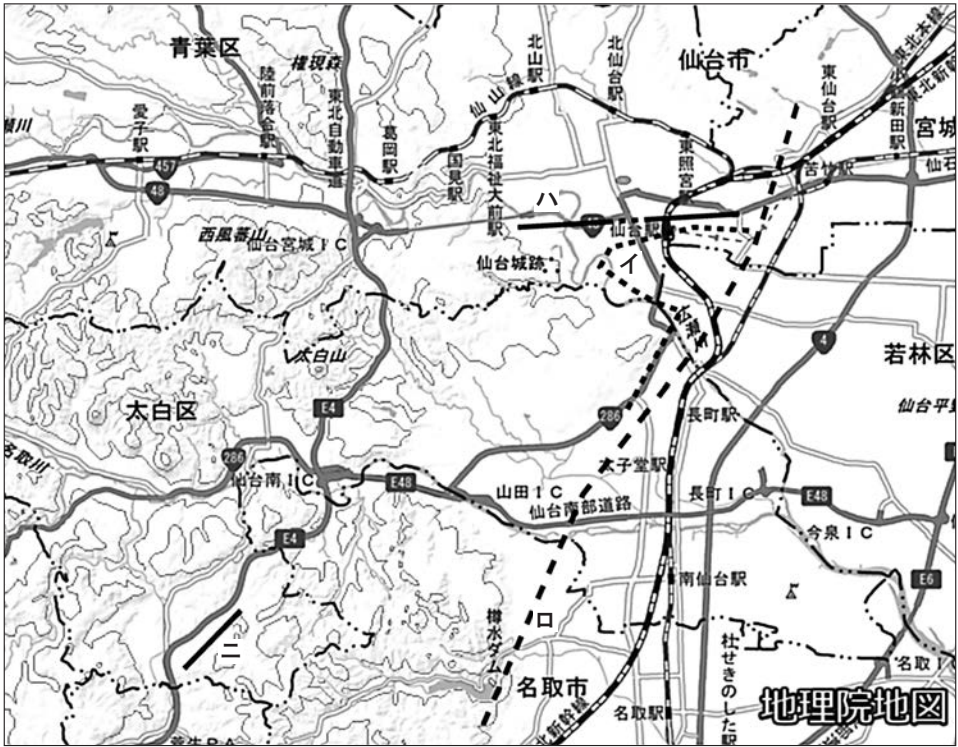


表 仙台市内の「あづまかいどう」

.....	イ
-----	ロ
-----	ハ
=====	ニ



写真1



写真2

②で述べられている越路経由のものがある⁽¹⁾。『仙台市史』ではこれとは違い、市域に入っても茂ヶ崎山方面へは向かわずに、太白区長町方面から宮城野区原町、そして宮城郡利府町方面へと北上する道筋⁽²⁾が考察の対象にされている。確かに当該道路の推定線上には、南から東北本線・常磐線・仙台空港鉄道の東街道踏切（写真1）があり、その北に位置する木ノ下には、近代以降に制作された道路名を刻んだ石碑が立つ（写真2）。そして、さらに北にある仙石線沿いには、地下化による連続立体交差事業で撤去されるまで、東街道踏切が設置されていたという具合に、道路の痕跡が点々と残されている。もちろんこの部分は位置関係から判断して、⁽¹⁾とは別物である。

仙台市街地の「あづまかいどう」はこの二つに留まらない。越路の北に位置する仙台城内にも、「あづまかいどう」があったと伝わる。仙台城築城以前、城域にあった寂光寺という寺院に関連して、『残月台本荒萩』（巻之二）は次のような記述がある。

史料③

私伝にいわく。寂光寺は。本御本丸に立居たり。今残月亭の辺也。この残月亭は。御本丸御二丸間にて。御二丸御座の間向北高き所にあり。御物見亭なり。（中略）此残月亭の西後は昔の東海道也。是より大手松木番所へ出。大橋川え出て渡り。本荒町の本荒の里より。宮城野へ行くと見へたり。（後略）

本丸と二ノ丸との間にある、残月亭という建物の西に昔の東海道があり、道路は大手門の右側にあった松ノ木番所を過ぎ、広瀬川を

渡って元荒町（一番町一―二丁目・大町二丁目）を経由して⁽¹⁾・⁽²⁾と同様、宮城野に向かっていたという⁽³⁾。前出の『囊塵埃捨録』では、こちらを出羽国に至ると道路としている（巻之二）。「あづまかいどう」は陸奥国の主要幹線道路との関連性が指摘されているのだから、名前は同じでも⁽⁴⁾は別の道路ということになる。

ここまで用いてきた資料は、いずれも近世以降に成立したもので、近世以前の話が語られているものの、内容の信憑性を同時代資料で検証できず、伝聞や伝承に基づいている公算が大きい。そこで本稿では資料の語るところをそのまま受け入れ、上記の各地点の事例の正誤は問わず、各地点に「あづまかいどう」という名前の道路があったという事実を重視したい。

なお、活字化されていない伝承としては、仙台市街地を離れた、仙台市太白区坪沼板橋から境田にかけての丘陵上にも「あづまかいどう」という名の道路が残ることを、佐藤達夫氏は報告している⁽⁵⁾。当地は笠島道祖神前／塩手村の実方中将の墓付近を北上する道路からは丘陵一つ西側、仙台城からは南西の位置に当たするため、⁽¹⁾・⁽⁶⁾とは別系統の道路と判断する。佐藤氏は件の道路沿いに、仙台市指定文化財の上前十三塚があることをもって、中世には利用されていた道路とする。

上記の道路たちが、近世以前のどの幹線道路の系譜に属するかは、資料不足で定かではない。どころか、東山道や奥大道とは別物だった可能性もある。こう考える理由は、岩手県奥州市江刺地区にあった。いずれも『安永風土記』からの抜粋である。

史料④―A 「風土記御用書出」 江刺郡片岡村

一道筋 七筋

- 一 一筋 但し岩谷堂町より気仙えの道
- 一 一筋 但し岩谷堂町より上口内町えの道
- 一 一筋 但し岩谷堂町より下門岡村えの道
- 一 一筋 但し岩谷堂町より人首町野手崎町えの道
- 一 一筋 但し岩谷堂町より上伊沢水沢町えの道
- 一 一筋 但し岩谷堂町より黒石町えの道
- 一 一筋 但しあつま海道の由申し伝え候古道

史料④―B 「風土記御用書出」 江刺郡倉沢村

一道 三筋

- 一 片岡村岩谷堂町より上伊沢相去町御番所への道
- 一 右岩谷堂町より下門岡村寺坂を通り南部御領立花村への道

一 片岡村より上門岡村への通用道 但し東海道と申し唱え候

史料④―C 「風土記御用書出」 江刺郡上門岡村

一道 三筋

- 一 妻ノ神坂 但し岩谷堂町より寺坂を通り南部御領立花村えの通路
- 一 東街道倉沢村境柏木立より上口内町えの通路
- 一 上胆沢相去町より上口内町えの道

いずれの村も北上川東岸にあることに注意したい。今日の奥州市

周辺における古代東山道の駅家擬定地は、奥州市前沢の白鳥、そして同市水沢の胆沢と、いずれも北上川西岸にある。よって北上川東岸の「あづまかいどう」を古代由来とした場合、東山道は白鳥駅と胆沢駅との間で一旦に同川を渡河し、史料④の土地を経由して再度渡河するという、大迂回路を採っていたこととなる。もちろん、最短距離で拠点間を結ぶことを身上とする駅路では受け入れがたい道筋である。かつて中央政府が設置した、胆沢城（奥州市）・志波城（盛岡市）・徳旦城（矢巾町）の各出先機関も、北上川西岸にあるのだから、各施設を最短距離で結ぶためには、同川西岸を通行した方が合理的である。

中世の奥大道も、平泉陥落後に同道沿いに厨川を目指した頼朝らは、志波郡陣岡¹⁵・厨川¹⁶と進軍したように、道筋は北上川西岸に終始する。さらに近世の奥州街道、そして今日の国道4号線、それに東北自動車道路と、当地域の最重要幹線道路は一貫して北上川西岸にあり続ける。だから同川東岸の「あづまかいどう」は、東山道や奥大道とは考えがたい。この点、『江刺市史』も、当地の「あづまかいどう」を平泉藤原氏時代のものとし、奥大道と接続する江刺地区の幹線道路と評価するのは、時期比定はともかく、道路の性格としては納得のいく指摘である。

ところで『江刺市史』には、次の文書も収録され、文政年間頃の年次比定がなされている。

史料⑤ 「東街道」（『江刺市史』第五巻資料編近世Ⅳ）

江刺郡の内、餅田村土谷村石山村右三ヶ村に往古東海道と申す

往還これあり、只今は人馬共二通用これなき荒道に相成り、併せて歩人ならびに馬も稀には通用致し候らえ共、細道に罷り成り候、脇に並松これあり左に

一 並松百六十九本

右の内 一 十七本

但 廻り四尺位より六尺位迄

一 五十一本

但 廻り五尺余より六尺位迄

一 六十六本

但 廻り六尺余より七尺位

一 二十九本

〃 〃 七尺余より八尺位迄

一 八本

〃 〃 八尺余より九尺迄

但 九尺廻り一本

餅田・土谷・石山もまた、北上川東岸の村々だった。『安永風土記』では、これらの村に「あづまかいどう」の姿を確認できないが、取りこぼしだろうか。交通環境の変化を受けて利用も稀となった結果、道路の規模縮小という流れは他と一緒に、一六九本の松並木が目を引き。中世の事例としては、織田信長が領内の道路の脇に松柳を植えた例があるものの、幹線道路の並木が一般的になるのは近世以降、江戸幕府や各藩の道路政策⁽¹⁷⁾下である。当地の松を江戸時代初期の植樹と仮定すると、当該史料の作成時期と推測される文

政年間（一八一八―一八三一）まで、二百年ほど経過しているから、松樹も相応の成長を遂げていたはずで、整合性はとれる。

以上をまとめると、「あづまかいどう」は一本の道路ではなく、あくまでも近世時点における古道の総称であり、目的地も来歴も異なる複数の道路から構成されていたとなる。ちなみに、「かまくらかいどう」においても、同意の指摘がなされている。⁽¹⁸⁾「あづまかいどう」沿道には、古代・中世の史跡が点在し、当該期に道路が機能していたことの傍証とされる。けれども、史跡付近に古代・中世の道路があったことはいえても、史跡の機能していた当時、その道路が「あづまかいどう」と呼ばれ、指摘されているような役割を果たしていたかは確証がない。

ここで疑問となるのは、歴史も経路も異なる不特定多数の道路たちが、等しく「あづまかいどう」と呼ばれた理由である。この道路名称が文献資料で確認できるのは近世以降だから、呼称の背景には当時の仙台藩領民たちの道路観や歴史観が潜んでいると推測される。

二「あづま」が意味するもの

「陸奥国東海道宇多庄⁽¹⁹⁾」という表現があるように、中世には今日の福島県相馬地方を指し、東海道と呼ぶ場合があった。これに基づき、「あづまかいどう」の歴史を古代に引きつける立場からは、中世の東海道を先述の古代の「海道」と結びつけ、東海道方面から北進してきた道路ゆえ、かかる命名を生んだとされる。⁽²⁰⁾ただし、地域

名称は「とうかいどう」であっても、道路名称は字面こそ違え「あづまかいどう」と呼称する例が多いため、件の指摘は一考を要する。もし道路名称が東海道に起因するなら、経年による転訛があっても、「トウ」の響きを何らかの形で残すはずだが、実際には「アツマ」という読みだから、両者は別物の可能性が高い。

漢字表記の揺れは、まず名称が先行し、恐らく江戸時代に、地誌や村絵図の制作などがあった際、道路名を漢字表記する必要性に迫られ、資料を提出する個々の土地で、音に基づいて漢字が当てられた経緯を想像させる。だから漢字表記が統一されていないのである。この間、あるものに「東海道」という字が与えられたために、地域名称との混合が起きたのではなからうか。

確かに太平洋岸を北上してきた海道との絡みで道路名を説明するのは、太平洋岸に比較的近い宮城県南部では、説得力があったろう。けれども、さらに北方の内陸部に当たると、先の奥州市の事例も海道の範囲に入れるのは、距離的にも位置的にも離れている。

「あづま」「あずま」という言葉を『日本国語大辞典』で引いてみよう。まず都から東の方の諸国の称とあり、東国として、広くは東海道・東山道以東の陸奥国までを含んでいたが、奈良時代以降は次第に現在の関東地方を指すようになっていったとある。もっとも仙台藩土による自藩関連の著作に、『東藩事物紀源』（玉虫尚茂著）や『東藩野乗』（小野寺鳳谷著）などの題名を持つものがあるように、陸奥国を「あづま」の一部とする意識は江戸時代にも生きていた。そこで「あづまかいどう」とは、ちょうど中世の奥（州）の主要幹

線道路が「奥大道」だったように、あづま（＝東国）の主要街道と目されての命名という仮説が提示できる。

なお、同じ「あづま」の一隅をなす群馬県の南東部には、「あづま道」と呼ばれる古道が残されている。やはりこちらも江戸時代の資料に現れる道路名称である点に注目したい。坂井隆氏は当該道路について、十二世紀の浅間山噴火後、かつての東山道を再興する形で、在地武士団の手で作り上げられた幹線道路としていた。さらに氏は、やがて東山道が持つ畿内と東北地方とを連絡する需要自体が薄れた結果、副次的な道路となっていくと指摘していた。留意すべきは道路沿線に源義経を始めとする武人通行伝説や、貴人に関係する牛の疲労伝説―貴人や彼に関連する荷物を載せた牛が疲労死したという類いの―が残されていることで、坂井氏は西からやってくる貴人や牛に、都―牛が牽く牛車は貴族の乗り物である―方面との交流の記憶を見いだす。²¹⁾

都との交流に関わる伝承は、「あづまかいどう」沿道でも確認できる。『安永風土記』によると、岩手県一関市にあった「東海道跡」は坂上田村麻呂が通過したといひ（赤荻村）、宮城県白石市の「うるい峠」は源義経の陸奥下向時の吾妻海道だったという具合に（郡山村）、彼の地から訪れた著名人が登場する。あるいは史料③の道路の沿道にある杉の老樹は認鑑ヤクテノスキ小杉と呼ばれ、藤原秀衡の上京伝説と共に、通過時に彼が矢を射込んだという言い伝えを持ち、近くには国司赴任中に死亡した藤原実方の墓とされる遺跡もある（『奥羽観蹟聞老志』）。

もっともいずれも伝承であり、それも近世の資料に載る以上、後世の付会である公算が大きい。だが、道路を巡る言説に彼の地が立ち現れること自体には、大きな意味がある。群馬県の「あずま道」が、都方面に続く道路と見做されていた結果の命名としたら、やはり都との交流を伝える「あづまかいどう」においても、同様の経緯が推測できるからだ。

『古事記』には「道奥」。『和名抄』では「陸奥」を「みちのおく」と訓じるように、「あづまかいどう」に足跡を印した人たちの出発地とされた都周辺の人々にとり、陸奥国は道路の最果ての土地に終始した。通信や交通手段の未熟な時代、物理的な距離の遠さは、政治経済に始まり文化や学術など、あらゆる分野における都からの距離の遠さを意味した。距離が生み出す都との物理的・精神的な時間差や、両者に起因する種々の差異は、風習や言葉の違いも相まって、陸奥国を辺境の後進地とする認識と、これに起因する二つの意識、優越感と劣等感の形成の母胎となった。うち前近代では、中央の優越感と地方の劣等感という図式が目立つ。

菅原孝標女による『更級物語』は、冒頭に「あづま路の道のはてよりも、猶奥つかたに生い出たる人、いか許かはあやしかりけむを」と、中央から離れた土地に生を受けたことへの劣等感が綴られる。なお、東北に対する他地域の優越感については、「あづまかいどう」が資料に現れる近世に入ると、より露骨な嫌悪感が加わり、流布されていくとする河西英通氏の指摘がある²³。

天明八（一七八八）年、江戸幕府の巡見使の随行員として、東北

地方を旅した古川古松軒は、道中の記録を『東遊雜記』としてまとめている。そこでは東北地方を「辺土・「辺鄙」とし、現地の事物を「人物・言語も至って悪しく」（田島）「夷風の残りし者」（鶴岡）などと酷評する箇所が目立つ。彼の価値基準の一つは、「言語もこれまでと違って中国の言語に似てよし」（本莊）・「上方筋の城下と違って見ぐるし」（秋田）というように、自分の故郷の中国筋や上方の文物に置かれていた。そしてもう一つが、帰途通過した常陸国新治郡府中（茨城県石岡市）での、「水戸よりの街道筋はよき道にて往来も繁く、江戸に近き土地ゆえ、万事よく似て俗ならず」という記述が示すとおり、江戸との距離だった。

古松軒の目に珍奇に映った文物や言葉は、内容の優劣ではなく、自分にとって馴染みの場所である中国筋、そして先進地だった歴史を持つ上方、目下の列島の実質的な中心地である江戸から隔たった土地のものという、単にそれだけの理由で、未開で劣等なものとして評価されていた。だからこそ「秋田・津軽の辺鄙の悪所」のもとと先、津軽海峡を越えた松前や江差町に、想像とは異なる非東北的な風景が広がることに彼は驚く。古松軒が江戸以北では最高の土地とする両地は、上方との交流が盛んで、上方のヒトや言語が入り込み、それが東北・北海道における異界を作り出していたのだった。

菅原孝標女もそうだが、古松軒が地方を評価する基準は、突き詰めれば中央との距離にある。中央から離れれば離れるほど、中央との連絡は難事となるが、これはあらゆる面における中央の価値を上げ、結句、中央は正当性の同義と化する。

三 懸け橋・物差しとしての「あづまかいどう」

遠隔地で中央との回路を持つことは、伝手や経済的余裕が要るだけに、誰もが簡単にはできない反面、上手く回路を繋げられた者には、難しい作業であるぶん、またとない実力誇示となった。回路を通じて中央の官位や官職を得たり、場合によっては中央貴族との婚姻関係を持つなどして、中央の一翼に連なれば、地元での余人との違いはいっそう際立つ。そして、この関係を日常の様々な局面で活用することで、彼は自身の立場を強化できた。平泉藤原氏と中央との関係は、まさしくこの図式に則っていた。

この種のものも含め、中央と地方との各種交流の架け橋になった道具こそ、両者を結ぶ幹線道路だった。それゆえ中央に通じる道路の有無は、土地を評価するための一つの物差しとなった。どころか道路は里程によって中央との距離を客観視でき、その数字をもって余所との具体的な比較を可能とするだけに、非常に有効な物差しだった。

従って中央と連絡する道路の有無は、地域評価の重要な項目となる。ここで考えなければならないのは、近世以前の奥州には多賀城や平泉といった重要拠点があったにも関わらず、「あづまかいどう」関係の伝承世界では、都との交流が中心になる理由である。近場の拠点ではなく、あえて列島の中心との往来が取りざたされるのは、そうでないと土地の価値が高まらなかったためと推測する。

さて、今日の仙台市街地を貫いていたはずの奥大道は、通説的理解に従えば「かまくらかいどう」中道なのだから、領内に「かまくらかいどう」伝承があってしかるべきだが、少なくとも近世の地誌には記事を確認できない²³。その理由は、「あづまかいどう」誕生の背景と表裏一体をなしていた。端的に言えば、それは地方における中央の受容のされ方だったのである。

一般的に、中央からの距離があるほど、現地における中央の価値は高まるが、そのぶん現地では、中央とは何かを自問する機会が増える。自らの繋がる対象が本当に中央の名に値するか否かは、己の正当性や優位性に直結する重要な命題となるからである。列島の正当な中心はどこかという問いの前に、征夷大將軍の都市だった鎌倉は、將軍の国政上の位置づけや由緒、あるいは都市の歴史において、天皇という列島最高の権威がいる京都には及ばない。なにより鎌倉も「あづま」の一隅にあるのだから、同じ地域にある都市という点で、鎌倉は多賀城や平泉と同列となってしまう、「あづまかいどう」の目的地としては、特段の利点がない。列島の中央から離れた土地ゆえの中心性への希求と、その強さが道路の目的地に鎌倉ではなく、京都を選ばせたのだった。

地方における中央への想いの強さは、すでに阿刀田令造氏が大同十四（一九二五）年刊行の『名取郡誌』において、「あづまかいどう」関連事績も絡めて指摘していた。氏は

この郡には固有の口碑伝説が乏しく、特に東街道付近に都がかつたその多い事は、右の消息を示す好個の材料であろう。何ん

で奥州三界まで来なければ、三条小鍛冶宗近が名刀を鍛へ得られないのであらうか。百合若大臣は都に帰り、後再び時めくに至た筈であるのに、何が為に東平王の塚が、此の大臣の墓かも知れぬのを説に持つに至つたのであらうか。大臣の愛鷹は足に結びつけられた硯の重みに堪へず、海中に落ちて死んだ筈なのに、何が為に其の硯が鷹硯寺に伝はるに至つたのであらうかと皮肉っぽく述べ、

斯くの如きは総て都の空気をば此の奥州に滲はしめたいの熱望から来つた製造品ではあるまいか

としている。もっとも実態は憧憬という言葉だけは片づかず、地域や地域住人の自己認識とも深く関わる、より切実な動機も絡んでいたのである。

人々は自分の住む土地に、中央との回路の記憶を見だし、時には創作や再解釈を施し、自己認識と誇りの拠り所とした。先の群馬県の事例では、かつての東山道の記憶は、この目的の下に再利用されたのである。道路の目的地である京都は、首都としての歴史的正当性では、近世段階における同県の最重要幹線道路が向かう江戸を上回るのだった。旧仙台藩領の「あづまかいどう」もまた、同種の産物であり、来歴も道筋も様々な古道群は、この名前と、京都に向かう道路に相応しい歴史や物語を与えられ、地域の評価を高める材料となつたのである。

おわりに

ここまで検討してきたように、「あづまかいどう」とは、固有の時代の特定の道路ではなく、誕生した時代も、目的地も異なる複数の道路の集合体だった。群馬県の事例を参考にすると、様々な道路が「あづまかいどう」の名前の下に集約され、中央と結びつけられたのは、近世以降の出来事だった可能性が高い。自ずと道路を巡る言説には、近世人の中央への心象が投影されていると見做すべきで、当然、目的地や性格など、道路に関する基本的な情報は鵜呑みにできないのである。その意味では、この道路を使って古代や中世を論じてきた従来の研究は、新たな研究方法を採す必要がある。

しかし、これは歴史資料としての「あづまかいどう」を否定するものではない。確かに本来の歴史とは別に、後世の人々による物語の後付けがあるにせよ、見方を変えれば、道路を糸口にする事で、近世人の持つ地域認識や、古代・中世観の検討が可能となるのである。近世人の精神世界を探る道具としての「あづまかいどう」を使うことで生まれてくるだろう、地域像や歴史像を楽しみつつ、本稿を終えることにしたい。

註

(1) この道路の表記は、『安永風土記』という一つのカテゴリの資料中

ですら、「我妻海道」(刈田郡白石本郷)「東海道」(宮城郡国分沖通苦竹村)・「吾妻海道」(桃生郡深谷浜市村)・「あづま海道」(江刺郡片岡村)のように一定しない。ゆえに本稿では資料に即して話を進める場合を除き、音に基づいて「あづまかいどう」と表記することとする。

- (2) 仙台藩域を対象にした地誌には、明和九(安永元・一七七二年)完成の『封内風土記』があり、こちらは藩領全ての分が揃っている。『同』の改訂を目指しつつも、未完に終わった『安永風土記』は、現時点では藩領全ての村や知行所の分が揃っていない欠点を抱えるが、前者の改訂を目指しただけに、前者に比べて情報量は豊富であり、それは「あづまかいどう」関連記事においても例外ではない。こうした事情を鑑み、本稿では後者を主な材料として使用することにした。

- (3) 地域学習の成果としては、例えば岩手県江刺市(現奥州市江刺)を対象に「あづま海道歩くの会」による調査成果をまとめた『あづま海道——清衡道とその風土』(佐島直三郎責任編集、あづま海道歩くの会、一九九三)がある。

- (4) 「かまくらかいどう」(やはりこちらも表記は定まっておらず、資料には「鎌倉街道」・「鎌倉海道」・「鎌倉道」など、さまざまな表記が現れるため、以後こゝ表記する)との類似性については、二つの道路を合わせて検討した新稿を発表する予定である。詳しくはこちらを参考されたい。

- (5) 『仙台市史』近世編¹。

- (6) 真山悟「奥羽の山道と海道」『東北歴史博物館研究紀要』一三、二〇一二。

- (7) 『宮城県の地名』(平凡社)の「東山道」・「名取市」の項や、『角川日本地名大辞典4 宮城県』の「東街道」の項。

- (8) 『日本後紀』(弘仁二年四月二十二日条)

- (9) 神英雄「古代仙台平野の交通路に関する一考察」『龍谷史壇』九〇、一九八七。

- (10) 『仙台市史』通史編2 古代中世。

- (11) 難波信雄・大石直正『街道の日本史』8 仙台・松島と陸前諸街道

吉川弘文館、二〇〇四。

- (12) 現在地名との対比は『宮城県の地名』(平凡社)や、『角川日本地名大辞典4 宮城』(角川出版)によった。

- (13) 佐藤達夫「仙台市太白区坪沼に見る 伝承「あづま街道」の道跡」『仙台郷土研究』二七五、二〇〇七。

- (14) 『延喜式』

- (15) 『吾妻鏡』治承五年九月四日条。

- (16) 『同』治承五年九月十二日条。

- (17) 『信長公記』

- (18) 「かまくらかいどう」を、近世段階における古道の集合体とするものには、例えば斎藤慎一氏の見解がある(『同』中世を道から読む)講談社、二〇一〇。

- (19) 「相馬胤頼軍忠状案」『南北朝遺文』1-446号文書

- (20) 前掲註(6) 参照。

- (21) 坂井隆「あづま道」上野のポスト東山道(藤原良章編『中世のまちを歩く』高志書院、二〇〇四)。

- (22) 河西英通『東北——つくられた異境』中央公論新社、二〇〇一。

- (23) 宮城県志田郡松山町教育委員会(現在は宮城県大崎市)が発行した『千石城跡保存整備基本計画』(一九九〇)には、町内にある千石城付近に、この名称の道路があった旨を記すが、近世の地誌に道路の存在は確認できない。

服部英雄氏は、各地の「かまくらかいどう」には郷土史家が推測、命名したと思しき例や、地域おこしの一環として、現代に提唱されたものも含まれるという、重大な指摘をしている(『峠の歴史学 古道をたずねて』朝日新聞出版、二〇〇七)。そのため当地の事例については、近世以降に他地域の「かまくらかいどう」情報を元に創作された可能性を視野に入れるべきだろう。また、先の仙台市太白区坪沼の「あづまかいどう」についても、同じ理由から他地域の「あづまかいどう」の事例を基に、近世以降に誕生した可能性を考えてみる必要がある。